

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 27cm 経緯儀を天文台プレミュージアムに搬入、復元、展示

昨日発見した、27cm 経緯儀を天文台プレミュージアムに搬入した。基線尺倉庫からこれらの木箱をリヤカーに積み込み、自動光電子午環(PMC)棟まで運ぶのは1人で何とかだった。しかし、PMC 玄関から望遠鏡フロアに上げるのは1人ではとても無理であった。運よく工事の下見をしているらしい工事関係者が 30~40m ばかり先を通りかかったので、声をかけ手伝ってもらった。PMC 望遠鏡フロアには展示の台に使えるものが既になくなっていましたので、基線尺倉庫にあった展示の台に使えるような空き箱(写真1)をPMCに運ぶことにした。これもリヤカーに積み込み、運ぶのは1人で何とかだったが、階段を1人で引っ張りあげてを考えると、基線尺倉庫にあったテント用の丸柱4本一緒に運んだ。この空き箱はリヤカーの荷台にすっぽり入る大きさで、結構重かった。この空き箱は赤外線観測装置を開発していた佐藤修二氏が観測装置を観測のためにハワイ往復に使っていたものでしっかりしたものであった。その荷札がまだ貼ってあった(写真2)。



写真1 展示の台に使った輸送箱

この木箱をPMCに運んだときには、運悪く誰も通りかからなかった。こんな時には自慢の腕力と智慧がものをいう。階段にテントの丸柱を立てかけ、重い木箱を力任せに引き上げた。とてもダメかと何度も思ったがついに2階まで引き上げた。27cm 経緯儀の木箱は3個であったが、別に写真測量器械と書かれた木箱2個、回照器と書かれた木箱1個を搬入した。この写真測量器械、回照器については項を改める。

搬入した木箱は倉庫に長く保管されていたため埃まみれである。まずこれを雑巾で拭い



写真2 ハワイへの荷札

この荷札は懐かしい、佐藤修二氏は、現在は名古屋大学理学部物理学Z研究室の名物教授だ。一緒に仕事をしていたころが思い出される。受取人はお世話になったトニー・シルベスターだ。

て中の機械を取り出す。この取り出す作業は手順をよく考えねばならない。輸送用に工夫が凝らされ、木枠がネジ止めされているのを順序よく外して、箱の底の台ごと引っ張り出すのである。まず架台部分を取り出し、展示台にする木箱の上に3点の脚を置き設置した。次に望遠鏡部を取り出し、架台の上に載せ、水準器を載せ、これで完成(写真3)である。この経緯儀にもローラー軸受けがあるが、東西反転機構はないように見える。



写真3 復元され、展示台の木箱に載せられた27cm 経緯儀

長い年月、倉庫で眠っていた27cm 経緯儀はこのようにして明るい場所に出てきた。なんという美しさではないか。神々しいまでに美しい。

このように基線尺倉庫で発見される昔の機械は全て美しい。90mm バンベルヒ子午儀、70mm バンベルヒ子午儀、50mm バンベルヒ子午儀、プラン子午儀、どれも金ピカで美しく「お宝」として発見されてきた。

この27cm 経緯儀もバンベルヒ製である。刻印(写真4)が読めた。「ASKANIA WERKE BAMBERGWERK BERLIN-FRIEDENAU Nr. 73510」シリアルナンバーがNo. 73510とある。驚くほど大きな数字だが、上の何桁かは機種を現しているのであろうと思う。同じバンベルヒでもその刻印はいろいろである。製作年代によるものと思われるが、この刻印は初めてである。刻印もまた風格があり、神々しいのである。



写真4 27cm 経緯儀の刻印
また、別の刻印（写真5）もある。



写真5 ASKANIA と読める刻印